

第16号

札幌交響くらぶ

発行／札幌くらぶ
 (財)札幌交響楽団内
 札幌市中央区中島公園1番15号
 (札幌コンサートホール内)
 電話 011-520-1771
 F A X 011-520-1772

新世紀は『新世界から』

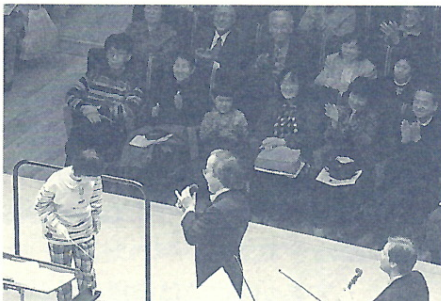
第3回札幌くらぶコンサート来月開催

会員の皆様にもご好評をいただいております「札幌くらぶコンサート」が、今年も開催されます。すでにチケットの発売も行われていますが、会員の皆様に上田実行委員長からのメッセージをお届けいたします。(プログラム等は8ページに掲載)

「札幌くらぶコンサート」は、少し特殊なコンサートです。私たち、札幌応援団「札幌くらぶ」の、道民の宝である札幌交響楽団の演奏を、少しでも多くの方々に親んでもらい、定期演奏会にも気軽にお出でいただきたい、とりわけ、次代の札幌ファンを創り出したい、という気持ちを理解していただくために低廉なコンサートを、という熱望を、(財)札幌交響楽団と楽員の方々にご理解をいただき、実現したもののなのです。このようなことは、日本中のオーケストラでは極めてまれな例と感謝しております。

過去2回実施したコンサートでは、趣旨をご理解いただいた会員の皆様に、一人でも多くの方に札幌ファンになってもらいたいとの思いから、チケット販売に多大なご協力をいただき、多数のご来場をいただきました。アンケート調査でも、賛同の声を多数いただき、心から、御礼申し上げる次第です。

特に、第2回の昨年のコンサートでは、ミュージック・アドバイザー・常任指揮者の尾高忠明氏のご協力により、氏の指揮とお話で満場の聴衆を魅了し、札幌の演奏会は常にかくあるべし、とでも言うような「ボレロ」をメインとした陶酔的なコンサートを実現することが出来ました。



第2回コンサートから



第2回コンサートから

今回のコンサートは、その時の聴衆の皆様から寄せられましたリクエストを最優先に企画しました。圧倒的な支持を受けた「新世界」がメインです。

前回までと同様、低廉な料金を設定し、高校生の無料招待も継続いたします。更には、従来設けておりました親子券をやめ、おとなと子ども一人はすべて3000円で好きな座席を選んでいただけるようにもいたしました。

指揮とお話は、「名曲シリーズ」や、テレビ、ラジオでおなじみの作曲家青島広志氏にお願いすることにいたしました。青島流解釈による「新世界」を是非ご期待下さい。

最後に、今年は札幌創立40周年記念の英国公演が行われます。当然、多額の費用が必要です。このコンサートの会場におきましても、会員の皆様のご支援をお願いしたいと思っておりますが、終了後の交流会会費でも若干のご協力をいただきたいと思います。ご協力、よろしく願います。

皆様のご来場を、実行委員一同、心からお待ち申し上げます。

(札幌くらぶコンサート実行委員長 上田文雄)

指揮者と語る

2001年2月16日の第432回定期演奏会を指揮された大山さんに、本番前日のリハーサル終了後、竹津宜男さんと対談していただきました。

九州交響楽団常任指揮者

大山平一郎さん

おおやま へいいちろう

キタラがホームの札幌
贅沢で羨ましい!!



大山平一郎さんのプロフィール

京都生まれ。桐朋学園で江藤俊哉、鷺見三郎、齋藤秀雄各氏に師事。1966年日本音楽コンクール、ヴァイオリン部門で入賞。68年渡英しギルドホール音楽学校で、70年からは米国インディアナ大学で学ぶ。インディアナ大学コンクールではヴァイオリン・ヴィオラ両部門で同時優勝。72年マルボロ音楽祭にヴァイオリストとして参加後多数の国際音楽祭に招待され、また著名な音楽家とも協演する。73年カリフォルニア大学助教授に就任。翌年ニューヨーク国際ヤング・コンサート・アーティスト賞を受賞。79年にジュリーニ率いるロスアンジェルス・フィルの首席ヴァイオラ奏者に任命された後、指揮の勉強を始める。86年ロス・フィルを指揮、翌年アンドレ・プレヴィンに同楽団の副指揮者に任命され、数多くの定期演奏会等を指揮する。91年京都市交響楽団で日本デビュー。その後、多くのオーケストラを指揮している。

現在、サンタバーバラ室内オーケストラの音楽監督兼指揮者、カリフォルニア大学教授。99年4月から九州交響楽団常任指揮者を務めている。

竹津 英国のギルドホール音楽学校に行かれ、ニーマンさんの指導を受けることになったのはどなたかのご紹介だったのでしょうか。

大山 ええ、ヨーロッパへ行っていた同じ桐朋出身の友人からです。アメリカやウィーン、パリ以外の、あまり日本人が行っていないところで探していたのですが、イギリスなら英語で、とっつきやすいということもありましたから。

竹津 ニーマンさんはすごくいい先生なんだそうですね。

大山 はい。根本の根本をたたき上げる人で、そういうやり方でみっちり指導されました。習っているときは「今更そんなことは…」などと思っていましたが、2年過ぎて他の先生についてきたときに、「おまえはミスター・ニーマンに習ったんだろう。だったら心配ないよ」と言われました。今でも先生には感謝しています。

竹津 一生基礎として残っていくんですね。その後すぐアメリカに行かれたのですか。

大山 インディアナ大学でジョセフ・ギンゴールドや、ヴィオラのプリムローズに指導を受けました。日本でも江藤俊哉先生や鷺見三郎先生などに、あらゆる手法を習いましたし、様々な要素を提供していただきました。結局、いい演奏をするためには何でもできなければいけないということで、いろいろな方法を教わったことはよかったですし、あとは戦場に出てたたき上げることですね。私の場合は室内楽でアンサンブルの技をしごき上げられました。

竹津 ロス・フィルは募集していたのですか。

大山 いいえ。私はオーケストラには関心がなかったのですが、ヴィオラの首席奏者が抜けたということでスカウトされました。結局13年間、ジュリーニとプレヴィンのもとでロス・フィルにおりました。指揮の勉強を始めたのもそれからです。それも当時副指揮者だったチョン・ミョンフンが忙しくなって、彼ができなかった仕事をやってみてはと言われたのがきっかけです。

竹津 ロス・フィル時代には指揮のほかに、若い方の指導にも携わっていらっしゃいますね。

大山 私自身も本当に運がよかったですし、やはり、芸術の世界では先代の人から受け継いだものを後輩に伝授していくことが必要ですので、それができて光栄です。そういえば、PMFに来ていたミッシェル・キムがニューヨーク・フィルのアシスタント・コンサートマスターに今年就任します。クロスロード学校のオーケストラを指揮していたのですが、その期間には大変優秀なメンバーが何人もいました。

竹津 日本にお帰りになって何年になりますか。もう定住なさっているのですか。

大山 99年4月から九州交響楽団の常任指揮者になりましたから、2年ですか。でも、まだ米国と行ったり来たりです。

竹津 九響では、年何回ほど指揮をなさいましたか。

大山 1年目は25回ほどで、今年度は20回くらいでしょうか。でも、これからは札幌や新日フィル、神奈川フィルなどに出かけますので、少し減るかもしれませんね。富山にある桐朋のオーケストラアカデミーで指導をしたり外の仕事が増えますので。

竹津 キタラができて3年になるのですが、今回の札幌はいかがですか。

大山 キタラでの演奏は、今回で2回目なのですが、初めてのときから素晴らしいホールだなと感じました。ここをホームベースにできる札幌は、贅沢だなと思いますよ。羨ましいです。今日のリハーサルでも本番さながらの素晴らしい演奏をしていただきました。

竹津 札幌にあのホールができて、市民も行くのが楽しみで繰り返し行くようになり、札幌の会員が増えることにもつながっていきますので有り難いことです。

九響で、そんなに指揮をなさっているということは、福岡以外にもあちこち出かけられているんですね。

大山 そうですね。オーケストラの常任指揮者として寄与するには、とにかく練習しないことには結果が出ませんので、小さな演奏会でも練習時間が確保できるものはやりたいです、と申し出ておりました。それはそれなりの成果が出てきているかなと思っています。九響も素晴らしいオーケストラで、南国特有の、血が濃いというんでしょうか、そんな演奏で



す。

竹津 北のはずれと南のはずれで、札幌と九響はつながりがありますが、街同士も仲が良く、どこか、気性の合うところがあるのでしょうか。今回は、園田高弘さんと一緒ですが。

大山 はい。あれだけの考え、信念を持って、音でお手本を示して下さる、今の音楽家としては、日本の宝ですね。コンチェルトの場合、オーケストラが伴奏だと思われたら、そこでおしまいなのですが、園田先生は、オーケストラがしっかりしてくれないと僕は弾けないとおっしゃられるくらい、共存を強調される方です。私は、室内楽で内声を弾いていますから、ファーストヴァイオリンに隙があれば自己主張をするような精神で演奏しますので共感できることがあります。

竹津 ヴィオラという楽器は、高音も低音もよく聞こえて、オーケストラの中では、接着剤のような役割ですよ。

大山 中声を高めにとるか、低めにとるかで、和音の響きの感触が違ってきます。

竹津 全体の音色と、バランスを握っているんですね。ヴィオラをやっていると、オーケストラのサウンドについて厳しくなるんでしょうね。

それでは、明日の演奏会を楽しみにしております。本日はありがとうございました。

大山 ありがとうございました。

力強い指揮ぶりとはまったく印象の違う、温厚な人柄がにじみ出るような話し方の大山さんでした。

来年1月の定期にもいらっしゃる予定ですので、楽しみです。

(文責 長屋純子)

FAN CLUBの初

仙台フィルハーモニークラブ(SPC)

今号は、熱烈なファンクラブとして円光寺さんからもうわさをうかがっていました、仙台フィルハーモニー管弦楽団のファンクラブ「仙台フィルハーモニークラブ（略称SPC）」をご紹介します。

俺たち仙フィルの“勝手連”

『新年度は、発表されたばかりの「定期演奏会スケジュール」を手帳に書き写すことから始まる。まず「シーズンオープニングコンサート」を聴き、5月の定期が終わるともう6月定期が気になってCDで予習し、定期初日で熱くなれば2日目も聴く。雨ニモ負ケズ風ニモ負ケズ、北に地方巡演あれば車で追っかけ、南に東京公演あれば新幹線に飛び乗る。定期のない師走は「第9特別演奏会」を聴き、「ニューイヤークンサート」で新年を迎える頃には来年度のスケジュールの発表が待ち遠しい。そのような人には私はナッテイルノグ！これって異常なのだろうか？自分だけだったらちょっと怖い。でも、そうでもなさそうだ。だって、こんな僕が毎度見かける人が何人かいるもの。こないだなんか、あの男性と会釈を交わしてしまった。今日はあの女性に話しかけてみようかしら。でも、ヘンタイだと思われないかな？終演後にあんな人たちとコーヒーでも飲みながらおしゃべりなんかできたら、もっと楽しいのになあ。東北人ってどうしてこう、はにかみ屋なんだろう。何か「クラブ」のようなものがあつたら絶対に入ってやるんだけど。』と悶々としている人が実は沢山いたのです。

1995年、高橋望さん（初代会長）が会結成の呼びかけを始めると、あっという間に50人ほどの同好の士が集まりました。こうなると「仙フィルファン」という共通項があるので、“東北人のはにかみ”などはどこへやら、堰を切ったように自慢話が飛び交い

ます。曰く「仙フィルの前身の宮城フィルの、それもアマチュア時代から聴いている」「第13回定期からだから、もう15年になる」「レコード2000枚持っている」、かと思うと「円光寺さん（当時は仙フィルの常任指揮者）の顔が見たくて、いつも最前列。音楽はあまり詳しくないの」「仙フィルのTシャツ3枚持ってまーす」等々、もう10年来の親友のようです。

第1回総会は同年9月に開かれました。当時の仙フィルの事務局長・吉井實行氏の祝辞「私の知る限り、SPCは日本で最初の、ファンによる自主的なオーケストラの応援組織です」が、当クラブの基本的な性格を言い表しています。つまり私たちは、どこからの働きかけもお膳立もなく、大好きな仙フィルを聴衆の立場から勝手に応援してしまおうという、純然たる市民応援団なのです。自主運営ですので、収入のほとんどは会員が納める年会費や機関誌の売り上げ（会員は無料）のみ。会長は互選、事務局は事務局長宅。会議もその都度、空いている施設で開いています。

このようにして「プロフィール」のところに書いたような活動を続けて、昨年9月で5周年を迎えました。過去最大の企画は、昨年の「欧州公演応援ツアー」でしょうね。今後も、仙フィルを熱烈にサポートしながら自分達も徹底的に楽しむという方向で、更に仲間を増やし、活動を強化して行きたいと思っています。

（SPC会長 工藤一郎）



SPCのシンボルマーク

仙台フィルハーモニー管弦楽団

1973年宮城フィルハーモニー管弦楽団として結成。1978年宮城フィルハーモニー協会の社団法人化によりプロオーケストラとなる。1989年仙台市の政令指定都市化を機に、仙台フィルハーモニー管弦楽団と改称。音楽監督外山雄三、常任指揮者 円光寺雅彦両氏の体制となる。1992年財団法人として独立。2000年より常任指揮者に梅田俊明氏が就任。定期演奏会を年間9回18日間行う等、演奏回数は年130回に及び、地域に根ざした活動を目指している。2000年には初の欧州公演を実現。

仙台フィルハーモニークラブ

仙台フィルのサポートと、オケとファンとの結びつきの強化を目指して1995年に設立。会員数は172名。年間の主な活動は、機関誌の発行（年3回）、「SPC通信」の発行（11回）、楽員との交流会（2回）、ゲネプロ見学会（不定）、「おもしろセミナー」（楽員を講師にトークと演奏、1回）、イベント「オーケストラはまちの宝もの」実行委員会への参画等。当面の重点は、より楽しく有意義な活動、「SPC大賞」授与等による「仙フィルサウンド」形成への聴衆参加。

札幌物語 XVI

式典での演奏

～札幌市新年互礼会～



日本でも、近年、年越しのジルベスター・コンサート（独語：大晦日演奏会）やウィーン・フィルのニューイヤー・コンサート風のコンサートが新年早々に行われるようになってきました。

札幌が出来た頃、テレビは普及し始めたのですが、まだまだラジオの時代でした。大晦日にはNHK交響楽団の演奏するベートーヴェンの「第九交響曲」がラジオから聞こえてくるのが恒例でした。録音が万全でない時代から続いた放送なので、N響は生演奏で放送していたのです。

札幌は誕生した翌年、1962年から1963年を除いて1967年まで、元旦の朝9時から札幌市民会館で行われる札幌市新年互礼会で演奏をしていました。

演奏曲目はヘンデルの「王宮の花火の音楽から」とかエルガーの行進曲「威風堂々」やJ・シュトラウスの「春の声」などでした。

創立40周年を迎える現在の札幌では、話題にもならない易しいプログラムですが、創立当時のレパートリーの少ない演奏団体にとっては易しくない演奏曲目だったのです。

朝9時からの本番ともなると、身体がほぐれていないため、最低1時間前からウォーミングアップをしたいのですが、元旦の早朝に下宿で音出しもならず、ほとんどの楽団員は8時には札幌市民会館へ集まっていました。

当時はステージマネージャーがいないため、初代のインスペクターを務めた私は、オーケストラのステージのセッティング作業もしたのです。元旦は、6時に当時の練習場だった中島児童会館へ楽器の搬出に行き、7時から札幌市民会館でのステージ・セッティングにかかりました。

創立当時、札幌の楽団員の平均年齢は21歳でした。東京など遠くから来た若い楽団員達は、それぞれの親元に思いを馳せながら、大晦日の夜は仲間のアパートでラジオから聞こえてくるN響の「第九交響曲」に耳を傾けながら杯を傾けていました。

大晦日なのに、早くから下宿で一人で寝るのも侘しく、ついつい、仲間と語り合っただけに及ばず、元旦の早朝には起きる自信がないため、「互礼会が終わってから寝よう」と、寝ないで、そのまま式典に参加したメンバーも少なくなかったようです。

その頃、すすき野には屋台がたくさんありました。屋台のおばさん達は、とても人情に厚い人達でした。屋台でも、ラジオの「第九」に耳を傾けながらおでんを食べ、その後、衣装や楽器は預かってもらって、北海道神宮に初詣に行き、再び屋台へ帰って、おばさんが作ってくれた雑煮を食べて出て来た楽団員もありました。40年前の札幌には、そんな風情がありました。

札幌メンバーにとっては、札幌市新年互礼会が終わってから正月は来るものでした。

「第九」は、創立3年目で、聴く音楽から弾く音楽に変わりました。

1997年に札幌コンサートホールKitaraが出来てから、毎年大晦日に行われるジルベスター・コンサートは、札幌の新しい風物詩として定着してきました。

40年前、札幌市議会関係者や、幹部職員のために行われていた、札幌市新年互礼会が、歳月を経て、市民が楽しむ大晦日と新年のコンサートに生まれ変わったようです。

(竹津宜男)

PLAYER'S TALK

札幌交響楽団 首席ヴィオラ奏者

ひろかり あきら
廣狩 亮 さん

今回は1月の定期演奏会にソリストとして登場された廣狩亮さんの特集です。

廣狩さんは、今年1月19日の第431回定期演奏会で、林光作曲「ヴィオラ協奏曲-悲歌-」で札幌と協演、高い評価を受けられました。

1月の定期演奏会を終えて…

終わって「フニャ〜」って感じでした（笑）。去年の秋に大阪でリサイタルをしたり、FMの番組に出演したり、ずーっと緊張しっぱなしでしたから。

あの曲は聴いたことがなくて、やっと録音を手に入れて、初めて知った曲なんです。ああいう協奏曲は、ずっとソリストとして活動していれば、馴れとこのか、度胸で行けるのでしょうか。

何もわかっていない若い頃は怖くないんですよ。年とってくるうちに、人の演奏を聴いたり、ああやっちゃダメ、こうしなきゃって考えるようになって、それでだんだん怖くなってきます。多分、学生の時なら「ふっ、こんなもの」って感じだったでしょうけど（笑）。

今日（1月28日）の、エルガーの「序奏とアレグロ」みたいに、オケの中で弦楽四重奏をするのも初めてでしたが、この前の定期の時にソロを弾いたばかりだったから、今日のは、楽でした。まるっきり一人じゃなくて、一緒に弾いている人がいるし。

初めて（それもソロで）演奏する曲って…

曲のイメージを作るには、とりあえず弾いてみます。「こうしよう」、「ああしよう」とは決めずに「こんな感じかな〜？」と。

指揮の円光寺さんとは、年が明けてから一緒の機会があったので、「ここ、どんな風に弾きたい？」とか「ここ、どれくらいあける？」とか、練習に入る1週間前くらいから、いろいろ打ち合わせすることができました。理知的に「ここをこうしたい」とか考えるタイプじゃないので、とにかく弾いて、あまり考えないようにしています。あまり考えると、自



分の中で整理がつかなくなって、ワケ判らなくなりますが（笑）。

技術的には、現代の曲なので、高音が多いなど、ちょっと難しい面はありました。本番で普段通り弾けるかどうか、っていう難しさがある曲でしたね。ソリストとして弾く時は、普段とは違う弾き方になるし、オケの仕事をしながらソロのことも考えなきゃいけない、っていうのは難しい部分がありますね。

ソロをやったのは広島で「イタリアのハロルド」を弾いて以来ですから、4年ぶりくらいですかね。オケでソロを弾いたのは、学生やアマチュアの時も入れて7回か8回くらいですね。

…「足にきちゃった」

演奏に関しては、「弓置いたとたん、ガリっていったらどうしよう」「弓を置こうとして置けなくて、ガタガタいったらどうしよう」というようなことばかり考えていました。最初の20小節は、100回も200回も練習して弾いているんだけど、それでも怖い。最初がカンジンだから、最初さえ乗り切れれば、ほかでも怖いところいっぱいあるんだけど、そこもなんとか乗り切れると思っているから、「緊張する練習」をしました。ステージに立って、多くのお客さんに見られていて…、っていうような想像をして弾いてみるんです。でも、本番ではそんなこと忘れちゃって、すごく足にきちゃった（笑）。

一番前の席の人には見えたと思いますね。ズボンが「ぶるぶる〜」っていうのが。まわりで弾いているみんなにも、自分の緊張をうつしちゃったんじゃないかな。

その時奥さんは…

すぐ後ろでチェロを弾いていたカミさんにまで緊

張をうつしちゃいました(笑)。

やっぱり怖いでしょうね～、だんなが前に出て一人で弾いていると。逆に、オケの中でチェロのソロの部分のカミさんが弾くような時は、「ちゃんと弾いてよ」とか「大丈夫かい」なんて思ってしまうから。こっちもソロを弾く時に「安心しとけ！」とは言えませんし。

家の中でそわそわしているのも、用もないのに冷蔵庫をパカパカ開けているのも見られていますからね。何をしても落ち着かなくて、また練習初めて…っていうのも知っていますから、よけい心配してくれているんですが、そんな時、何か言われてもどうしようもない。だからむこうも、何も言わないで、「私眠いから先に寝るわ」って(笑)。

ヴィオラ弾かなきゃ損?!

ヴァイオリンを習い始めたのは4歳の時です。自分から「習いたい」と言ったらしいんです。近所に教える人がいて、友達が習いに行っているところを見に行って、自分もやりたくなくてダダこねたらしい。記憶にはないけど。教則本についていたレコードを聴きながら、4時間も5時間も弾いていたらしいですよ。

高校の音楽科では、ヴァイオリンとヴィオラの両方を弾いていました。当時の先生から、「そこまで手の大きい人は、ヴィオラやんなきゃ損だよ。今、足りていないから。本当に必要だから！3日間で決めなさい！絶対ヴィオラに替えた方が得だから。替えるなら今しかないよ！」と言われまして。前半はヴァイオリンで試験受けていましたが、3年の最後はヴィオラで受けました。ヴィオラに替えてからは両方弾くのはやめて、ヴァイオリンは手放しました。

はじめは、学校の定期演奏会などで、ヴィオラを「弾かされていた」というイメージがあって嫌いだったけど、弾いたら確かにいい音が出る。手の小さい人が「痛い！腱鞘炎になる！」とか言っているのと比べて、自分は手が大きいし、苦痛じゃなかった。

勧められてやってみたのですが、本当に向いているみたいだし、ヴィオラの曲も自分に合っているみたいだし、で、大学はヴィオラで入りました。大学に入ってから、仕事になるっていう実感は無かったけれど、自然と仕事になってしまいました。

雪かき…好き。

北海道の気候は大好き！南国神戸の生まれですけど、スキーも高校の時からやっていて、雪大好きだから。雪かきだってどんどんします。

東京の大学から広島、大阪と、ずっと暖かいとこ

ろで仕事をしてきて、札幌に、初めてエキストラで来た時には、「ひええ～、寒い～！」って感じでした。

でも、飛行機に乗っていて、雪の大地が見えて、どれだけ寒いんだろうって気温を見てみたらマイナス15℃。もう目がキラキラ(笑)。冬道運転だけは今もちょっと怖いんですけど。事故起こしちゃいけないですから。でも、ワクワクしています。「生きてる～！」って感じです。



釣りなんかも好きですから、ヒマがあれば「ワカサギ釣りに行こうかな」って。釣れなくても、吹雪いてもいい。帰りに温泉に入って。

秋頃に、鮭釣りもやってみたいんですけど、去年はその時期ちょうど忙しくて行けませんでした。カミさんも釣りは好きだし、温泉も好きだから、あちこち仕事で行く度に、ちょっと釣りをしたり、温泉に入ったりしています。

あと、こっちに来て、美味しいと思ったのは野菜ですね。ジャガイモとかアスパラガスとか。向こうで食べていたのとは全然味が違いますよ。生まれた時から美味しいもの食べてるなんて、なんだか、北海道の人ってかわいそうだ…マズイもの知らないんだなって(笑)。

札幌くらぶって

札幌くらぶみたいな団体って、前にいたオケにはなかったし、あるってということ自体がおもしろいですよね。会員さんの数もすごいし。これからも会員がどんどん増えたら、もっとおもしろくなるかもしれませんね。

♪パソコンが趣味の廣狩さんのホームページはこちら

<http://www.rt.sakura.ne.jp/~karikari/>

(インタビュアー 西野留理子・長屋純子・鎌田清美)

from 「札幌くらぶ」

「第3回札幌くらぶコンサート」が約1か月後に迫ってきました。会員の皆様には、すでにDMが送られて、その内容もおわかりかと思いますが、プログラムなど、コンサートの概要をお知らせいたします。皆様お誘い合わせの上、ご来場くださいますよう、お待ちしております。

また、指揮をお願いしました青島広志さんから、コンサートに寄せてのメッセージをいただきましたのでご紹介いたします。

第3回札幌くらぶコンサートのご案内

プログラム

- 第1部 モーツァルト／歌劇「フィガロの結婚」序曲
ビゼー／歌劇「カルメン」組曲第1番
シューベルト／劇付随音楽「ロザムンデ」間奏曲
オッフェンバッハ／喜歌劇「天国と地獄」序曲 ～指揮者コーナー～
(休憩)

- 第2部 ドヴォルザーク／交響曲第9番「新世界から」

指揮とお話 青島 広志 (作曲家・ピアニスト・今回は指揮者)

管弦楽 札幌交響楽団

日時 平成13年5月26日(土) 午後5時開演(4時30分開場)

場所 札幌コンサートホール Kitara 大ホール

入場料 一般 2500円 学生(高校生以下) 500円

取扱所 大丸プレイガイド・キトラチケットセンター・札幌チケットサービス

お問い合わせは札幌チケットサービス (Tel 011-520-1780) へ

第3回札幌くらぶコンサートに寄せて

この文を書いている一時間ほど前、東京サントリーホールで札幌交響楽団の演奏を聴いていました。当日、私が指揮させていただくドヴォルザークの作品のみのプログラムで、耳からは、とても高貴で田園的な音が流れ込んで来て、こうしたすばらしい演奏団体と、この私と一緒にいいのかと、胸がドキドキしてしまったのです。

でも、いいのです！ 私も皆さんと一緒に札幌のお客様になって、素晴らしい時間を共有できれば最高なのではないでしょうか、と、開き直すことにしました。

それに、お客様に指揮者になっていただくコーナーがあります。おそらく、私より上手な人が出ていらして、「後半はお願いします」ってことになったりして……。

青島 広志

編集後記

3月28日、サントリーホールでの東京演奏会に、機会があって行ってきました。24日の札幌と同プログラムで、期せずして、二つのホールの聴き比べとなりました。私の乏しい経験で言うのはおこがましいと思いますが、音・建物・環

境・運営など総合的な面からして、キトラはやはり素晴らしいと思いました。大山さんが言われる「羨ましい」はお世辞ではないと思います。

演奏は、札幌に劣らぬ熱演で、東京の聴衆からも盛んな拍手を得ていました。(佐藤良次)